

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 20 日現在

機関番号：33929

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520117

研究課題名(和文)日本の祖師・高僧像の総合的研究 - 制作目的と意義からの新たな解釈 -

研究課題名(英文)Comprehensive Study on the images of high priests in Japan

研究代表者

小野 佳代 (ONO, KAYO)

東海学園大学・人文学部・准教授

研究者番号：60386563

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：日本における祖師・高僧像は、宗祖の像あるいは寺院の開山の像として、古代より仏像と変らぬ礼拝対象として祀られてきた。しかし、各像の制作背景や歴史的経緯を詳細に検討してみると、従来考えられてきた「思慕の像」「礼拝の像」「師資相承の像」という枠組みでは捉えきれない僧形像が多数存在することが見えてきたのである。そこで本研究では、僧形像が制作された目的や意味、役割といった、新しい視点から像を捉え直すことによって、日本における祖師・高僧像制作の実態や本質を解明しようと試みる。

研究成果の概要(英文)：The images of high priests in Japan have been enshrined in temples as the images of the founder of a religious sect, or the priest who founded a temple from the ancient times, like the Buddha statue. However, after thoroughly studying the background of the productions and historical circumstances of each image, it becomes clear that there are many images that have different meanings from those pointed out by previous studies such as "Image for yearning", "Image for worship", "Image for generation-to-generation instruction from master to disciple". In this study, it is intended to clarify the circumstances and the essence concerning the production of the images of high priests in Japan, by analysing the purpose, meaning and role of the production of the images from a new perspective.

研究分野：仏教美術史 日本彫刻史

キーワード：祖師像 高僧像 羅漢像 聖僧 鑑真 行信 空海 真言五祖像

1. 研究開始当初の背景

美術史の分野における祖師・高僧像の研究は彫刻史、絵画史の各方面から行われてきたが、祖師・高僧像はほとんど仏像などと同じ範疇で捉えられ、研究のアプローチも、一人の祖師や高僧を取り上げて研究する、といった個別研究に終始したものが多い。

一方、各時代の祖師・高僧像を網羅して取り上げたものといえば、概説書の類しか見当たらない。というのも、祖師や高僧という、生まれも育ちも生き様も異なる僧侶たちの肖像を、一口にまとめられるはずもないことから、便宜上、「時代」「様式」「宗派」によって分類せざるを得ず、そこから導き出されたのが「思慕の像」「礼拝の像」「宗祖の像」「師資相承の像」といった共通の性格であったといえよう。

ところが、申請者がこれまでに行ってきた祖師・高僧像の研究から見出された各像のもつ性格は、従来指摘されてきた範疇を超えたものが多かった。そこで新しい視点から祖師・高僧像研究を見直す必要性を実感するに至ったのである。

2. 研究の目的

日本における祖師・高僧像は、宗祖の像あるいは寺院の開山の像として、古代より仏像と変らぬ礼拝対象として祀られてきた。しかし、各像の制作背景や歴史的経緯を詳細に検討してみると、従来考えられてきた「思慕の像」「礼拝の像」「師資相承の像」という枠組みでは捉えきれない僧形像が多数存在することが見えてきたのである。

そこで本研究では、祖師像・高僧像・聖僧といった、いわゆる僧形の像を取り上げ、旧来の「時代」「様式」「宗派」による分類法を一度取り除き、僧形像が制作された「目的」「意味」「役割」によって新たに分類し直すことによって、日本における祖師・高僧像制作の実態や本質を解明することを目的とする。すなわち、新たな分類法による祖師・高僧像の体系学的研究の構築を目指すものである。

3. 研究の方法

まず初年度の平成 24 年度は、「日本における僧形像制作・黎明期の研究」に着手し、日本で祖師・高僧像が制作され始めた奈良時代末～平安時代初期の聖僧の像や名もなき僧形像の制作状況を、古文書をもとに紐解いていく。翌平成 25 年度は、「奈良・平安時代の祖師・高僧像の調査・研究」、翌々年の平成 26 年度には「鎌倉時代の祖師・高僧像の調

査・研究」に取り組み、様々な祖師・高僧像を制作目的・意義・役割という観点から検討を加えていく。最終年度の平成 27 年度は、「日本の祖師・高僧像の新たな分類法の確立 - 像の意味からのアプローチ -」の研究に取り組む。日本の祖師・高僧像を「意味」「意義」の視点から捉え直す試みによって、新たな枠組みによる祖師・高僧像の体系学的研究を構築していく。新知見は関連学会や雑誌にて速やかに公表していく。

4. 研究成果

(1) 初年度の平成 24 年度は、「日本における僧形像制作・黎明期の研究」に取り組んだ。

まず、奈良時代の法隆寺、大安寺、西大寺、東大寺、興福寺の資財帳等を検討したところ、奈良時代の僧形像は、釈迦の事績を語る場面のほか、釈迦の靈鷲山浄土、阿弥陀の極楽浄土、薬師の瑠璃光浄土、さらに弥勒の兜率天浄土から下生後の弥勒の説法の場面に至るまで、実に様々な場面にあらわされていた。しかしどの場面の僧形像であれ、それらは釈迦の十大弟子などの“羅漢像”であったのは注目される。また大安寺と興福寺食堂院には「聖僧」の像が安置されていたが、この時期の聖僧とは賓頭盧尊者のことであろうから、詰まるところ、奈良時代の資財帳から見えてくる南都諸寺の僧形像とは、いずれも羅漢像に集約できるのである。

ところが、天平宝字七年(763)、中国の風習によって鑑真和上像が唐招提寺において造顕されたことによって、わが国の僧形像の歴史が大きく変化していくことになった。これまでの羅漢像から、同時代の実在の人物の肖像制作へと動き出すことになったのである。鑑真像の出現が、さらに法隆寺夢殿の行信像へとつながり、それがさらには興福寺南円堂の善珠・玄奘像へと連鎖し、奈良時代の終わりから平安時代にかけて、南都諸寺に肖像制作の機運が一期に広まっていったのである。

(2) 平成 25 年度は、奈良時代から平安時代に制作された祖師・高僧の現存作例を取り上げ、制作目的や意義のほか、祖師・高僧像が寺院内で果たした役割等を明らかにすることを目指した。

まず岡寺の義淵僧正坐像については、従来より義淵の肖像ではなく、賓頭盧像または僧形文殊像ではないかとの見方が強かったが、検討の結果、賓頭盧像である可能性が高まった。

つぎに、立石寺慈覚大師円仁像の研究に取り組んだ。本像は昭和 23 年に立石寺の円仁入定窟内の金棺の中より人骨とともに発見

された9世紀の木造頭部である。この頭部が円仁像である確証はないものの、1163年の奥書をもつ大東急記念文庫所蔵の『高僧像』に描かれた円仁像と顔の特徴が酷似しているのは注目される。先学によって指摘されてきたとおり、立石寺像は円仁像である可能性は極めて高い。この木造頭部が本来はどこで制作されたものであったかについては、今後さらに調査を進めていきたい。

(3)平成26年度は「鎌倉時代の祖師・高僧像の調査・研究」に着手した。西大寺の興正菩薩像は、弘安三年(1280)に仏師善春が手掛けた、叡尊八十歳の時の寿像である。この肖像は叡尊自身の発願による像ではなく、像内墨書銘によれば、弟子鏡恵らが三宝紹隆の心肝を仰ぎ、四衆(比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷)の修行の頼りとするを願って造像されたものであった。すなわち多くの弟子僧俗たちの結縁によって造立されたもので、西大寺流の門弟たちにとって重要な像であったばかりでなく、鎌倉時代中期の南都における結縁による記念碑的な像でもあり、鎌倉時代の歴史を語るうえできわめて重要な像という意義を見出すことができた。

(4)平成27年度は、平成24年より3年間取り組んできた調査研究の不備を補うとともに、得られた成果の整理・分析をとおして、日本の祖師・高僧像の新たな分類法の確立を目指した。不備を補ったのは主に平安時代の祖師画で、弘仁四年(813)に創建された興福寺南円堂の板壁に描かれた法相宗・天台宗・真言宗の祖師画に注目した。複数の史料にあたったところ、南円堂に描かれていた祖師とは、法相宗祖師の玄奘、天台宗祖師の慧思と智顛、真言宗祖師の金剛智、不空、善無畏、一行、恵果の計八人であった。つまり、法相宗の興福寺南円堂には、自宗の祖師を一人しか描かず、それどころか空海が大同元年(806)に唐より請来した真言五祖像に一致する五人を描いていたのである。

ではなぜ興福寺南円堂の発願者・藤原冬嗣は、南円堂の板壁に真言五祖像を描かせたのかを検討したところ、冬嗣の中国美術への興味・関心に加えて、冬嗣自身が空海請来の真言五祖像を実見する機会を得ていたことが大きく関係していることが明らかとなった。

こうした南円堂の祖師画の事例は、従来の「思慕の像」「礼拝の像」「師資相承の像」とは異なる動機で描かれた祖師画ということができよう。

祖師・高僧像の調査研究については、今後も継続して行っていく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

小野佳代「藤原冬嗣と興福寺南円堂の美術 - 祖師の壁画を中心に -」(『東海佛教』第61輯、査読有、p.175~p.190、2016年3月)

〔学会発表〕(計3件)

小野佳代「南都諸寺僧形像考 鑑真像と行信像の造立をめぐって」(『寺社縁起研究会関東支部・第110回例会、2013年3月、於近畿大学東京事務所』)

小野佳代「藤原冬嗣と興福寺南円堂の美術」(東海印度学仏教学会・第61回学術大会、2015年7月、於東海学園大学)

小野佳代「興福寺南円堂の壁画に関する問題」(『寺社縁起研究会関東支部・第117回例会、2016年3月、於近畿大学東京センター大会議室』)

〔図書〕(計2件)

小野佳代「奈良時代の南都諸寺の僧形像 - 鑑真像と行信像 -」(『てらゆきめぐれ大橋一章博士古稀記念論文集』、中央公論美術出版、p.289~p.304、2013年4月)

小野佳代「興福寺南円堂の創建者・藤原冬嗣をめぐる美術 祖師画の問題を中心に」(津田徹英編『仏教美術論集6 組織論 - 制作した人々 -』、竹林舎、p.48~p.67、2016年6月)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6．研究組織

(1)研究代表者

小野 佳代 (ONO Kayo)
東海学園大学・人文学部・准教授
研究者番号：60386563

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：